

タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった

宮沢賢治

青空文庫

ホロタイタネリは、小屋の出口で、でまかせのうたをうたいながら、何か細かくむしつたものを、ばたばたばたばた、棒で叩いて居りました。

「山のうえから、青い藤蔓とつてきた

…西風ゴスケに北風カスケ…

崖のうえから、赤い藤蔓とつてきた

…西風ゴスケに北風カスケ…

森のなかから、白い藤蔓とつてきた

…西風ゴスケに北風カスケ…

洞のなかから、黒い藤蔓とつてきた

…西風ゴスケに北風カスケ…

山のうえから、…」

タネリが叩いているものは、冬中かかって凍らして、こまかく裂いた藤蔓でした。

…西風ゴスケに北風カスケ…

崖のうえから、赤いけむりがふきだした

…西風ゴスケに北風カスケ…

森のなかから、白いけむりがふきだした

…西風ゴスケに北風カスケ…

洞のなかから、黒いけむりがふきだした

…西風ゴスケに北風カスケ…」

ところがタネリは、もうやめてしまいました。向うの野はらや丘が、あんまり立派で明るくて、それにかげろうが、「さあ行こう、さあ行こう。」というように、そこらいちめん、ゆらゆらのぼっているのです。

タネリはどうとう、叩いた蔓を一束もって、口でもにちやにちや噛みながら、そつちの方へ飛びだしました。

「森へは、はいつて行くんでないぞ。ながねの下で、白樺の皮、剥いで来よ。」うちのなかから、ホロタイタネリのお母さんが云いました。

タネリは、そのときはもう、子鹿のように走りはじめていましたので、返事する間もありませんでした。

枯れた草は、黄いろにあかるくひろがって、どこもかしこも、ごろごろころがってみたいくらい、そのはてでは、青ぞらが、つめたくなる光っています。タネリは、まるで、早く行つてその青ぞらを少し喰べるのだというふうに走りましました。

タネリの小屋が、兎ぐらに見えるころ、タネリはやつと走るのをやめて、ふぎけたように、口を大きくあきながら、頭をがたがたふりました。それから思い出したように、あの藤蔓を、また五六ぺんにちやにちや噛みました。その足もとに、去年の枯れた萱の穂が、三本倒れて、白くひかつて居りました。タネリは、もがもがつぶやきました。

「こいつらが

ざわざわざわざわ云つたのは、

ちようど昨日のことだった。

何して昨日のことだった？

雪を勘定しなければ、

ちようど昨日のことだった。」

ほんとうに、その雪は、まだあちこちのわずかな窪みや、向うの丘の四本の柏の木の下で、まだらになつて残っています。タネリは、大きく息をつきながら、まばゆい頭のうえ

を見ました。そこには、小さなすきとおる渦巻うずまきのようなものが、ついついと、のぼったりおりたりしているのです。タネリは、また口のなかで、きゆうくつそうに云いました。「雪のかわりに、これから雨が降るもんだから、

そうら、あんなに、雨の卵ができています。」

そのなめらかな青ぞらには、まだ何か、ちらちらちらちら、網あみになったり紋もんになったり、ゆれてるものがありました。タネリは、柔やわらかに囓をかんだ藤蔓を、いきなりぷつと吐はいてしまつて、こんどは力ちからいっぱい叫さけびました。

「ほう、太陽てんとうの、きものをそらで編あんでるぞ

いや、太陽てんとうの、きものを編あんでいるだけでない。

そんなら西のゴスケ風かぜだけか？

いや、西風せいふうゴスケでない

そんならホースケすがる、蜂はちだけか？

うんにや、ホースケすがる、蜂はちでない

そんなら、トースケ、ひばりはちだけか？

うんにや、トースケ、ひばりはちでない。」

タネリは、わからなくなっていました。そこで仕方なく、首をまげたまま、また藤蔓を一つまみとって、にちやにちや噛みはじめながら、かれ草をあるいて行きました。向うにはさつきの、四本の柏が立っていてつめたい風が吹きますと、去年の赤い枯れた葉は、一度にざらざら鳴りました。タネリはおもわず、やっと柔らかになりかけた藤蔓を、そこからへふつと吐いてしまつて、その西風のごスケといっしょに、大きな声で云いました。

「おい、柏の木、おいらおまえと遊びに来たよ。遊んでおくれ。」

この時、風が行つてしまいましたので、柏の木は、もうこそつとも云わなくなりました。「まだ睡ねてるのか、柏の木、遊びに来たから起きてくれ。」

柏の木が四本とも、やつぱりだまつていましたので、タネリは、怒おこつて云いました。

「雪のないとき、ねていると、

西風ごスケがゆすぶるぞ

ホースケすがる蜂が巣を食うぞ

トースケひばりが糞くそひるぞ。」

それでも柏は四本とも、やつぱり音をたてませんでした。タネリは、こつそり爪つまた立ててをして、その一本のそばへ進んで、耳をぴったり茶いろな幹にあてがって、なかのようすを

うかがいました。けれども、中はしんとして、まだ芽も葉もうごきはじめるもようがありませんでした。

「来たしるしだけつけてくよ。」タネリは、さびしそうにひとりでつぶやきながら、その枯れた草穂くさほをつかんで、あちこちに四つ、結び目をこしらえて、やつと安心したように、また藤の蔓をすこし口に入れてあるきだしました。

丘のうしろは、小さな湿地しつちになっていました。そこではまっくろな泥どろが、あたたかに春の湯気を吐き、そのあちこちには青じろい水ばしよう、牛べうの舌の花が、ぼんやりならんで咲いていました。タネリは思わず、また藤蔓を吐いてしまつて、勢いきおいよく湿地のへりを低い方へつたわりながら、その牛べうの舌の花に、一つずつ舌を出して挨拶あいさつしてあるきました。そらはいよいよ青くひかつて、そこらはいいと鳴るばかり、タネリはどうとう、たまらなくなつて、「おーい、誰たれか居たかあ。」と叫びました。すると花の列のうしろから、一びきの茶いろの藁ひきがえるが、のそのそ這はつてでてきました。タネリは、ぎくつとして立ちどまつてしまいました。それは藁ひきがえるの、這いながらかんがえていることが、まるで遠くで風でもつぶやくように、タネリの耳にきこえてきたのです。

(どうだい、おれの頭のうえは。

いつから、こんな、

ぺらぺら赤い火になつたろう。」

「火なんか燃えてない。」タネリは、こわごわ云いました。墓は、やっぱりのそのそ這いながら、

（そこらはみんな、桃ももいろをした木き耳みみだ。

ぜんたい、いつから、

こんなにぺらぺらしだしたのだろう。」といっています。タネリは、俄にわかにこわくなつて、いちもくさんに遁にげ出しました。

しばらく走つて、やつと気がつくとまつてみると、すぐ目の前に、四本の栗くりが立っていて、その一本の梢こずえには、黄金きんいろをした、やどり木の立派なまりがついていました。タネリは、やどり木に何か云おうとしましたが、あんまり走つて、胸がどかどかふいごのよう、どうしてもものが云えませんでした。早く息をみんな吐いてしまおうと思つて、青ぞらへ高く、ほうと叫んでも、まだなおりませんでした。藤蔓を一つまみ噛んでみても、まだなおりませんでした。そこでこんどはふつと吐き出してみましたら、ようやく叫べるようになりました。

「栗の木 死んだ、何して死んだ、

子どもにあたまを食われて死んだ。」

すると上の方で、やどりぎが、ちらつと笑ったようでした。タネリは、面白おもしろがつて節をつけてまた叫びました。

「栗の木食って 栗の木死んで

かけすが食って 子どもが死んで

夜鷹よだかが食って かけすが死んで

鷹は高くへ飛んでった。」

やどりぎが、上でべそをかいたようなので、タネリは高く笑いました。けれども、その笑い声が、潰つぶれたように丘へひびいて、それから遠くへ消えたとき、タネリは、しょんぼりしてしまいました。そしてさびしそうに、また藤の蔓を一つまみとって、にちやにちやと囓みはじめました。

その時、向うの丘の上を、一疋ひきの大きな白い鳥が、日を遮さかぎつて飛びたちました。はねのうらは桃いろにぎらぎらひかり、まるで鳥の王さまでもいうふう、タネリの胸は、まるで、酒でいっぱいになりました。タネリは、いま囓んだばかりの藤蔓を、勢よく

草に吐いて高く叫びました。

「おまえは鵲とぎという鳥かい。」

鳥は、あたりまえさというように、ゆつくり丘の向うへ飛んで、まもなく見えなくなりました。タネリは、まつしぐらに丘をかけのぼって、見えなくなった鳥を追いかけて丘の頂上に来て見ますと、鳥は、下の小さな谷間の、枯れた蘆あしのなかへ、いま飛び込むところです。タネリは、北風カスケより速く、丘を馳かけ下りて、その黄いろな蘆むらのまわりを、ぐるぐるまわりながら叫びました。

「おおい、鵲、

おいらはひとりなんだから、

おまえはおいらと遊んでおくれ。

おいらはひとりなんだから。」

鳥は、ついておいでというように、蘆のなかから飛びだして、南の青いそらの板に、射られた矢のようにかかけあがりました。タネリは、青い影法師かげぼうしといっしょに、ふらふらそれを追いました。かたくりの花は、その足もとで、たびたびゆらゆら燃えましたし、空はぐらぐらゆれました。鳥は俄かに羽をすぼめて、石ころみたいに、枯草の中に落ちては、

またまっすぐに飛びあがります。タネリも、つまずいて倒れてはまた起きあがって追いかけました。鳥ははるか西に外れて、青じろく光りながら飛んで行きます。タネリは、一つの丘をかけあがって、ころぶようにまたかけ下りました。そこは、ゆるやかな野原になつていて、向うは、ひどく暗い巨きな木立でした。鳥は、まっすぐにその森の中に落ち込みました。タネリは、胸を押えて、立ちどまってしまいました。向うの木立が、あんまり暗くて、それに何の木かわからないのです。ひばよりも暗く、樞よりもっと陰気で、なかには、どんなものがかくれているか知れませんでした。それに、何かきたいな怒鳴りや叫びが、中から聞えて来るのです。タネリは、いつでも遁げられるように、半分うしろを向いて、片足を出しながら、こわごわそつちへ叫んで見ました。

「鵝、鵝、おいらとあそんでおくれ。」

「えい、うるさい、すきなくらいそこらであそんでけ。」たしかにさっきの鳥でないちがつたものが、そんな工合にへんじしたのでした。

「鵝、鵝、だから出てきておくれ。」

「えい、うるさいつたら。ひとりでそこらであそんでけ。」

「鵝、鵝、おいらはもう行くよ。」

かくれて行つてまたのぼる。

そしてかくれてまたのぼる。」

タネリは、つかれ切つて、まつすぐにじぶんのうちへもどつて来ました。

「白樺しろかばの皮、剥はがして来たか。」タネリがうちに着いたとき、タネリのお母つかさんが、小屋の前で、こならの実を搗つかきながら云いました。

「うんにや。」タネリは、首をちぢめて答えました。

「藤蔓みんな噛じつて来たか。」

「うんにや、どこかへ無くしてしまつたよ。」タネリがぼんやり答えました。

「仕事に藤蔓噛みに行つて、無くしてくるものあるんだか。今年はおいら、おまえのきものは、一つも編んでやらないぞ。」お母つかさんが少し怒つて云いました。

「うん。けれどもおいら、一日噛んでいたようだったよ。」

タネリが、ぼんやりまた云いました。

「そうか。そんらいい。」お母つかさんは、タネリの顔付きを見て、安心したように、またこならの実を搗つかきはじめました。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社

1995（平成7）年2月1日発行

底本の親本：「新修宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：久保格

校正：鈴木厚司

2003年8月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

タネリはたしかにいちにち囁んでいたようだった
宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>